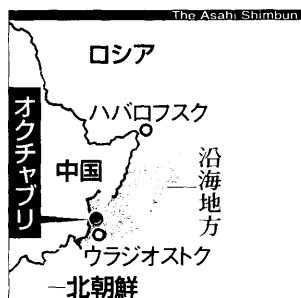


そば栽培 ロシア進出



広大なソバ畑で、ソバの生育具合を確認するチムチンさん(左)とイービストレードのロシア人社員(右)。オクチャブリ地区、西村大輔撮影

脱・中国依存、会社化めざす



中国や韓国の企業が続々と農場経営に乗り出しているロシア極東の沿海地方で、東京の商社イービストレードが今年から、地元農家と提携してソバ栽培を始めた。5年後には日本のソバ需要の1割弱にあたる1万トを極東から輸入する計画。日本企業が極東で大規模な農業経営に乗り出す初のケースとなりそうだ。

日本の技術を指導

ウラジオストクの北約150キロ、中国国境に近いオクチャブリ地区の田園地帯。一面に花が咲く約100畝のソバ畑で、生育具合を確認していた地元農家のチムチンさん(53)は「順調に育っているな」とうな

ずいた。隣では、カメラを持ったイービストレードのロシア人の女性社員が花や実の状態、乾燥機の性能について細かく確認。東京の本社に報告書を送る。

同社は今年、沿海地方の3農家と栽培契約を結び、約170畝の農地に日本のソバと近い品種を選んで作付けした。日本市場に合わせた乾燥工程や、実の選別に関する技術指導もする。今年収穫する2000トのうち半分を日本に輸入する予定で、ソバの品質が良ければ来年以降、一気に規模を拡大する。いずれは中国や

韓国の企業のように合併会社を設立し、広大な農地を取得する方針だ。

同社によると、日本国内のソバの需要は約13万トで、このうち輸入が10万ト。輸入の8割が中国からで、中国への依存度がきわめて高い状態だという。

ソバの輸入先の多角化を模索していた食品商社「新糧」(本社・東京)が、中国以外から調達する計画をイービストレードに持ちかけたことがきっかけだった。同社は昨年まで2年間、沿海地方でバイオデ

ィゼルの原料となる菜種の試験栽培の経験があり、地元人脈があったからだ。

北海道と似た気候

ロシアでは、ソバの実をゆで、主菜の付け合わせなどとして食べる。生産量は多く、ソバ栽培に経験豊富な農家も多い。北海道と気候が似ているため日本の農業技術が生かせる利点もある。ソバは長期の輸送で品質が落ちやすいことから、

日本から近い沿海地方は理想的だ。イービストレードの山田康夫事業部長は「注目されてこなかったが、実は沿海地方は日本のすぐ隣にある大穀倉地帯。農家の教育レベルも高い」と話す。日本はトウモロコシや小麦、大豆など、コメを除く主要穀物の9割前後を輸入し、大半を米国やカナダ、オーストラリアなど数力国に頼る。ロシアからの穀物輸入は極めて少なかった。

一方、極東ではソ連崩壊後の経済混乱や激しい人口流出などで、広大な耕作放棄地が生まれた。世界的に食糧価格が高騰した2006〜08年ごろから、耕作放棄地を格安で借りる形で、中韓の企業が農場経営に乗り出すケースが目立つ。日本でも注目され始め、北海道銀行が主導して来春、北海道の農業法人などがハバロフスク郊外で約千畝のモデル農場を開設、飼料用トウモロコシや牛乳などを生産する計画も浮上している。(オクチャブリ地区、西村大輔)